

第 34 回石川建築賞受賞 作品

◎優秀賞 伏見台の家

設計者：松島健建築設計事務所

施工者：みづほ工業株式会社



公園を南面に配した中庭形式の住宅である。公園の巨木越しには遠く白山連峰の山並みを臨む閑静な場所であるが、敷地東側にはアパート、北西側は水田に接しており、今後の開発如何により住環境の変化も考慮しなければならない難しい敷地でもある。

外構は、敷地条件を反映してか、内部空間を囲繞する閉鎖的な壁がちな表情を浮かべているが、抑制の効いたその壁面には内部空間を象徴する開口が穿たれ、奥行き感とともに生活の息遣いをも街路空間に滲ませている。

しかし内部空間の構成は、外構に見られる半隔離性とは対称的に、絶妙に高さを違えて融通無碍に諸室が連続し、中庭そして壁面の開口を介して外部空間とも重層的に交通する奥行き感を実現した連続性が支配する空間となっている。

この半隔離性と連続性のグラマトロジーを支える屋台骨として、単純な平面計画だけでは伺い知ることができない、巧みな断面構成にあることも指摘しておきたい。中二階の図書室からは公園の巨木がつくる緑の風景、二階デッキに繋がる外部階段は空の風景を誘導し、一階床高を外壁の開口部の高さで連動し歩行者と視線を合わせないように調整することでプライバシーを損なうことなく室内に街路の風景を導入することにも成功している。

入 選 住宅型有料老人ホーム ウェリナ

設計者：I NADE architects

施工者：株式会社 丸西組

[小松市八幡町]



加賀産業開発道路と小松バイパスとの交差地に当たる小松市東陵地区に位置し、地域外からのアクセス環境に恵まれた場所に立地する老人ホームである。

緩やかながら丘陵地の高台を敷地とするため、遙か西方には日本海から小松市街を遠景におさめ、周囲は親水空間や緑地に恵まれている。

サービス機能の連携を配慮した既存の通所介護施設とは、小気味よく手入れされた庭空間を介して連続し、入所者にとって快適な散策空間を提供している。

各階に設けられたデッキテラスは、建物の中心に設けられた各階ホール空間と連続し視覚的にも内外空間を結び、テラスでの寛ぎの様子や活動も可視化し易いためか、入居者が一日を通して長時間滞在するホール空間には閉塞感を感じさせない。

ホールは周囲に開放的なだけでなく EV シャフトにより適度な領域感を入所者に提供するとともに、居室管理にとっても死角を作り難い適度な距離感を保つのに成功している。

閑静な住宅街に立地していることもあり、外観のヴォリュームは低く抑えられ、建物の壁面を構成する無機質なアスロックの表情に対して、人が接触する範囲で木質材やブリックタイル張り等の仕上げに配慮することで、ヒューマンなスケール感をファサードに巧みに誘導している。

入 選 学校法人 金沢学院大学 第三清鐘寮

設計者：清水建設株式会社北陸支店一級建築士事務所

施工者：株式会社 双建

〔金沢市末町〕



北側に国指定名勝地でもある末浄水場園地に続く小立野台地の風景、南側に獅子吼から白山の山並みが一望できる河岸段丘特有の起伏に富んだ景勝地をロケーションとする。寮生活の大半を過ごすことになる居室は、こうした地の利を活かすため南北に配置されている。建物の外観は、二階以上の南北の居室棟とその間の共有エリア、一階大空間のカフェテリアへと建築計画に準じた無理のないヴォリューム分配がなされているためか、建物の実際の大きさの割には、圧迫感のないファサードを実現させている。

低層カフェテリア部はラーメン構造、小割空間で構成される寮室は壁式構造の混構造とし、加えて部材のプレキャスト（サイト PC）工法を導入するなど、高い施工技術により、緊張感あるグリッドパタンの意匠を高い精度で実現させている。

カフェテリア部分は南北方向に開けた庭空間との連続性を確保するため室内幅一杯に窓を穿ち、カフェテリア中央部も二層吹き抜け空間とするなど、解放感溢れる豊かな空間に仕上がっている。

南庭の道路境界部の塀もガラスブロックとし、室内側からの圧迫感を軽減するだけに留まらず、通りに対しても壁が夜間照明の役割を果たす等、歩行者にも優しい住環境を提供している点も評価された。

入 選 金沢職人大学校第2実習棟

設計者：株式会社 MAC 建築研修所

施工者：ほそ川建設株式会社

[金沢市大和町]



市民の芸術活動を支援する目的で設置された総合文化施設である金沢市民芸術村に併設された金沢職人大学の修復専攻科の第2実習棟である。金沢に残る伝統的で高度な職人の技の伝承と人材育成を行うことを目的に設置された学校は開校して既に15年以上経過したこともあり、煉瓦の趣を残す市民芸術村と暗色を基本にした職人大学校が醸し出す雰囲気は既に金沢の歴史的空間の一部として広く市民にも親しまれている。

第2実習棟は、質の高い都市景観の中に、教育プログラムとして不可欠な大きなヴォリュームを如何に組み入れるかという難問に対して、既存施設との意匠を継承し、統一的な建築景観の創造を「連なる景観」というコンセプトにより実現させた点が特に評価された。

既存建物に配慮し統一感を持たせるために使用材料、色彩に配慮することは基本とし、ヴォリュームをコントロールするため棟位置でハイサイドライトを取り大屋根の軒位置を出来る限り低く抑え込む等、随所にデザインによる調整が施されている。

また箔打ち機の導入に伴い、振動が伝わらないよう床下の構造を特殊工法で施工する等、技術面に対する評価も高かった。

入 選 庭と暮らす家

設計者：I N A D E architects

施工者：道場建設株式会社



北西側は中学校の校舎、東側は住宅に挟まれた奥行き深い形状ではあるが南側は道路に面した住居兼アトリエの職住近接の住まいである。敷地周辺は田園地に囲繞され、串川やアカバの森もあり落ち着いた低層住宅街の一角を敷地としている。

敷地の形状を活かして 20m 程の庭を通した引き込み空間がとられているが、オーナー自身 DIY で庭作りを進めており、如何にも生活そのものを楽しんでいる様子がアプローチからも伝わってくる。アトリエと共有する玄関はポーチと連続した伸びやかな空間となり、生活と仕事の切り替えにも効果的な距離感を実現させている。

西側にスケール感を逸した校舎が迫っているが、校舎に向け高く屋根を傾斜させることで、庭からは校舎のヴォリュームを気にさせない屋根デザインは、内部に展開する豊かなステップフロアの空間を自然に内包する機構として有機的に機能している。

生活の用途に合わせてフロア高さは調節され、住み主のライフステージに合わせて無理なく多様に運用できる可能性も評価された。

※今回は「知事賞」該当作品がありませんでした。